

国立国語研究所学術情報リポジトリ

開会のあいさつ

著者	影山 太郎
図書名	近代の日本語はこうしてできた : 国立国語研究所 第7回NINJALフォーラム
ページ	1-3
発行年	2014-07-31
シリーズ	NINJALフォーラムシリーズ ; 5
URL	http://doi.org/10.15084/00000925

開会のあいさつ

影山 太郎（国立国語研究所所長）



みなさま、よくいらつしやいました。今日は、国立国語研究所の第七回目の公開フォーラムということで、「近代の日本語はこのようにしてできた」という興味深いテーマをご用意しました。今、桜が満開ですが、本日の資料の表紙も桜の花が満開の華やかな図柄になっています。これと合わせて、講演会の内容も、近代の日本語が現在の姿に開花した過程をたどるというものになっています。戦前の日本語は、現在の日本語と比べてどのような状態だったのか、明治期から昭和初期までの日本語がどのようにして現代の姿に開花したのか、というのはいっしょに簡単な話ではありません。

日本語の歴史は、標準的な時代区分で言いますと、奈良期から平安期の古代語、鎌倉期・室町期中世語、江戸期の近世語に分かれます。本日のテーマである近代の日本語、つまり近代語と言いますのは、明治期から大正期、昭和初期、つまり第二次世界大戦までの日本語とお考えください。講演の中で、近代がどこからどこまで広がるのかという議論が出てくるかも知れませんが、とりあえず、そのようにご理解ください。

さて、近代語の状態を理解していただくためには、その前提として、今私たちが使っている現代の日本語がどのようなになっているのかということを確認していただくことが重要です。以前は、「日本語は世界の中で最も難しい言語である」とか「日本語は省略が多く曖昧な言語だから外国人はとても学べない」といった日本語論が流布していた時期がありました。しかしながら、そのような議論の多くは、外国語をよく知らない人の主観的な思い込みではなかったでしょうか。視点を変えて、日本人の立場ではなく外国人の立場から日本語をみると、実は、日本語の文法は比較的単純です。世界の諸言語を比較する言語類型論という分野の研究によると、地球上の約六千言語の中で日本語の発音や文法は比較的やさしく単純な部類にはいるとされています。

そのことは、アメリカ生まれのロジャー・パールバスさん……この方は言語学者ではなく作家・演出家なのですが……も、最近出された『驚くべき日本語』（集英社インターナショナル、二〇一四年）という本の中で熱く語っています。「驚くべき」というのは、英語の「amazing（アメイジング）」にあたると思いますが、この言葉は単に「驚く」

だけでなく、「驚くほど素晴らしい」という褒め言葉なのです。実際、バルバースさんは、外国人にとって日本語は非常に学びやすいと褒めちぎっています。もっとも、この人が比べているのは、英語のほか、極めて複雑な語尾変化を持つポーランド語やロシア語ですから、日本語がやさしいと思えるのは当然なのですが。

ところで、もしバルバースさんがこの二十一世紀の日本ではなく、明治時代、大正時代に来日されて日本語を習得されたら、同じように言ったでしょうか。また、江戸時代、さらには鎌倉時代、平安時代に来日されていたら、「日本語はやさしい」と言えたでしょうか。おそらく「ノー」だと思います。古代語は動詞その他の活用形が非常に複雑でした。現代の日本語は、不規則な活用形が残っているものの、全体としてはかなりすっきりしています。また、昔は八母音だったという説がありますが、現在は母音、子音も非常に単純化されています。

ということ、現在私たちがなげなく使っている日本語が言葉の仕組みとしては優れているということをご理解いただいたうえで、それでは、どのようにして明治、大正の近代語が現代の言葉に花ひらいていったのかという話題に移っていきます。

その当時は、言語としての自然な変化だけではなく、政治的な力も多くはたらいていました。年配の方々はそのあたりをよくご存知だと思います。明治の初めに、国語学者の上田萬年（まんねんとも言う）（一八六七―一九三七）が、国家の言語、国家語という意味で「国語」という言葉を作り、日本政府は国語というかけ声のもとに標準語の統一、仮名遣いの統一などを図ってきました。その反面、海外の植民地に日本語を押しつけ、国内ではアイヌ語を排斥したり、各地の方言、特に沖縄の言語を弾圧したりして、さまざまな悲惨な結果を生むことにつながってしまいました。ちなみに、現在の国立国語研究所は沖縄の言葉もアイヌの言葉も専門家を置いて大切に研究していますので、どうか安心ください。

さて、近代語の時代には、一般の国民のあいだでも国語、特に漢字の多さ、難しさが日本の近代化、民主化を妨げるという意見、意識が高まってきました。そのことから、漢字の数を制限すべしという意見や、漢字仮名を廃止してローマ字で表記してはどうかといった意見が出てきました。戦後すぐにGHQの要請によって日本に來た米国教育使節団もローマ字の使用を推奨しました。

一般的に言うと、言語というものは時間によって、地域によって自然に変化していくものです。しかし、日本語の近代化にあたっては、国の力、政治的な外圧による人工的な変化が少なくありませんでした。その結果、明治期か

ら大正期、昭和初期にかけての日本語は、政府にとっても国民にとっても非常に混乱した時代でした。その混乱期において、日本語を合理的な言語として継続的に安定させるための基盤作りに寄与するという目的で作られたのが、国立国語研究所だったのです。昭和二十三（一九四八）年のことです。今日のこれからの講演は、国立国語研究所ができる前の戦前の話になります。では、最後までお楽しみください。

